



高専入学者の選抜に関する研究 (その2) :
中学校教師への意識調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉野, 英太郎, 高橋, 参吉, 中馬, 義孝, 野々村, 昇, 畠山, 信敏, 松本, 俊郎, 宮本, 皓生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00008017

高専入学者の選抜に関する研究 (その2)

—— 中学校教師への意識調査 ——

A Research on Making a Selection for Admitting Students to Technical Colleges (2)

杉野英太郎*・高橋参吉**・中馬義孝*・野々村 昇***

畠山信敏***・松本俊郎*・宮本皓生****

Eitaro SUGINO*, Sankichi TAKAHASHI**, Yoshitaka CHUMAN*, Noboru NONOMURA***,

Nobutoshi HATAKEYAMA***, Toshiro MATSUMOTO* and Teruo MIYAMOTO****

(昭和58年4月13日受理)

1. まえがき

前報¹⁾では、全国高専における入学者選抜方法改善のための諸研究を、主として紀要に発表されたものについて整理する一方、各高専の入学者選抜の実状をアンケート調査し報告した。このように前報は受け入れ側としての高専を問題にしたが、今回は送り手である中学校を研究の対象にした。方法としては今回もアンケート調査を実施して考察の材料にしようとした。すなわち大阪府下の公立中学校全校に対し、校長、進路指導主任(以下「主任」と略す)は全員に、一般教師(以下「一般」と略す)は各校1~3名程度、年齢、性別が適当に分散するよう抽出してアンケートを送付した(昭和57年3月実施)。送付数と回収状況は表1の通りである。又、主任には昭和55年度卒業生中高専に進学した者の数を、一般には3年担任時にクラスに高専受験者がいたかどうかをそれぞれ答えてもらったので、その結果から「有無」だけを表2に示しておく。表1でわかる通り、回収率が低いのでこれをもって大阪府の公立中学校教師の意識として一般化することはできないが、その一端はうかがわれると思うので、ここに公表して参考に供する次第である。(なお、本文の2、3に関係する設問は校長には行わなかった。また本文の図表の数値は回収数に対する百分率である。)

表1 送付および回収状況

	校長	主任	一般	合計
送付数	408名	408名	632名	1,448名
回収数	157名	173名	153名	483名
回収率	38.5%	42.4%	24.2%	33.4%

表2 高専受験者、進学者の有無

主任	高専進学者あり	85名	49.1%
	高専進学者なし	88名	50.9%
一般	高専受験者あり	93名	60.8%
	高専受験者なし	60名	39.2%

* 機械工学科 (Department of Mechanical Engineering)

** 電気工学科 (Department of Electrical Engineering)

*** 一般教養科 (Department of General Education)

**** 工業化学科 (Department of Industrial Chemistry)

2. 高専への進路指導

高専を受験しようとする生徒とその父兄、指導する教師の意識はどのようなであろうか。ところで、大阪府下では全進学希望者に対する高専受験者の割合は1%にも満たない。高専受験者だけに限定して、進路指導の実態を調査するには余りに少数となるため、ここでは進学希望者について一般的傾向を調べて、高専受験のための進路指導を類推する他はない。

「生徒が進路を決定する際、だれの希望が反映されるか」という問いには、図1で示すように、生徒本人と答えたのが58.3%あり、次いで父兄(37.1%)、先生(15.0%)という順であった。この順番は高専進学の動機を問うた他高専での調査とまったく同じ結果であった。²⁾

「個別に進路指導を始めるにあたって、教師の判断と生徒・父兄の希望とに相違があるか」という問い(図2)には、父兄の希望と教師との間に相違がみられると答えたのが48.8%と最も高く、生徒と父兄の希望に違いがみられるのが27.0%、生徒と教師間では18.1%と低い。ほとんど相違がなく問題が少なくとしたのは19.3%しかなく、進路指導開始時では教師は、父兄や生徒の希望に対し何らかの差異を意識しながら、指導に当たっているようである。

次に「生徒が希望する進路が適切かどうか」と問うた結果を図3に示す。「適切だ」と答えたのは19.0%しかなく、不適切と理解される回答が極めて多かった。その中で「自己の成績を無視している場合」が最も多く(42.2%)、「進路先についての正確な情報にもとづかない場合」(29.1%)、「希望に対して主体性がない」(15.0%)というのがある。したがって、自己の成績把握の不正確さと進路先の情報不足が、指導上の問題点であると考えられる。さらに図4は、生徒の進路希望の場合と同じ傾向を、教師は父兄についても意識していることを示している。

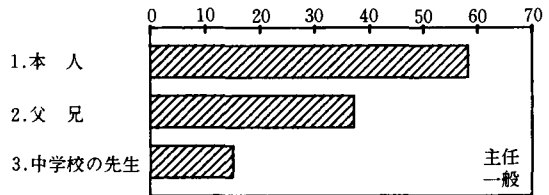


図1 進路決定

(設問 生徒が進路を決定する際、一般的にだれの希望が反映されやすいと思われますか。)

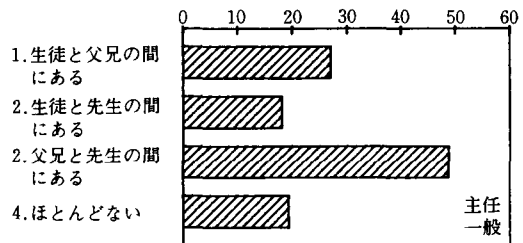


図2 希望の相違

(設問 進路に関して個別指導を開始する時点で、生徒の希望と父兄の希望と先生の判断の間に大きな相違がみられますか。)

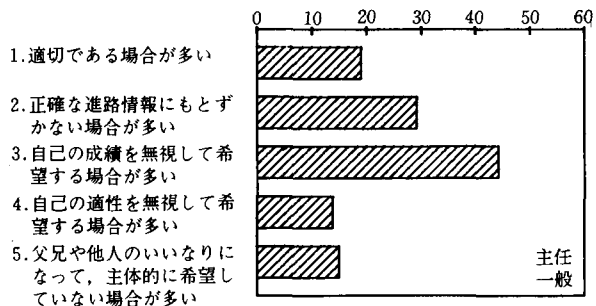


図3 生徒の希望の適切さ

(設問 その時点において希望する進路について、どのように思われますか。)

父兄が「子弟の成績を無視している場合」が41.7%あり、生徒の場合とほぼ同じ割合である。しかし、「正確な情報にもとづかない場合」が38.7%あり、生徒の場合より10%程高いのが特徴である。特に父兄に対して進路先の情報提供が必要となろう。また、「父兄の見栄や体裁で希望している」とするものが18.4%あった。これらに対し、「適切である」とするものが、わずか19.0%にすぎなかった。

高専を受験しようとする生徒には、どのような特徴があるのだろうか(図5)。高専受験者としては、「機械いじりや工作など技術的なものに興味」をもち(64.4%)、「理数系科目を得意」とし(57.1%)、「将来は技術者となる」という方針が明確で(57.1%)、さらに「自然科学の分野に興味を持っている」(52.8%)という像が浮かび上がってくる。一方、「親の職業」「高専以外の進路に魅力がない」については否定的回答が多く、また「技術家庭科が得意」「工業技術者としての適性がある」という項目には、肯定的回答が少なく、高専受験者の明確な特徴とはみなされていないようだ。なお、生徒を受験させたことのある教師とそうでない教師とに区別すると、将来への方針、自然科学への興味に関して、主任と一般ともに前者の方で肯定的回答が多くなっている。

「受験者が高専のどのような点に魅力を感じているか」という設問に対する結果が図6である。「入試日が他の公立高校と異なっているので、高専と両方が受験できる」という回答が最も高く(75.8%)「実践的工業技術者教育が行われている」(69.9%)「就職に有利である」(67.5%)「施設・設備が優れている」(57.7%)という項目がこれに続く。高等教育機関と

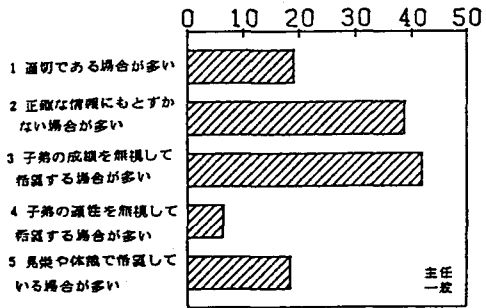


図4 父兄の希望の適切さ
 (設問 その時点で、子弟の進路に関する父兄の希望について、どのように思われますか。)

「受験者が高専のどのような点に魅力を感じているか」という設問に対する結果が図6である。「入試日が他の公立高校と異なっているので、高専と両方が受験できる」という回答が最も高く(75.8%)「実践的工業技術者教育が行われている」(69.9%)「就職に有利である」(67.5%)「施設・設備が優れている」(57.7%)という項目がこれに続く。高等教育機関と

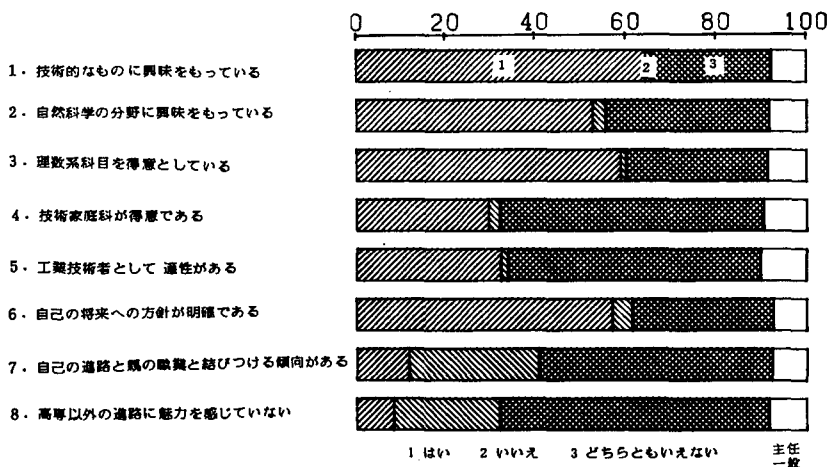


図5 高専受験者像 (空白部分は、無回答を示す。)
 (設問 高専を受験しようとする生徒にはどのような特徴がみられますか。)

しての高専に魅力を感じつつも、二度の入試の機会があるという入試制度上の点に、受験者は最大の魅力を感じているようだ。なお、受験者を高専に送った経験のある教師に限ってみると、肯定的な回答が最も多いのは「実践的工業技術者教育が行われている」という項目になる（主任78.8%，一般76.7%）。

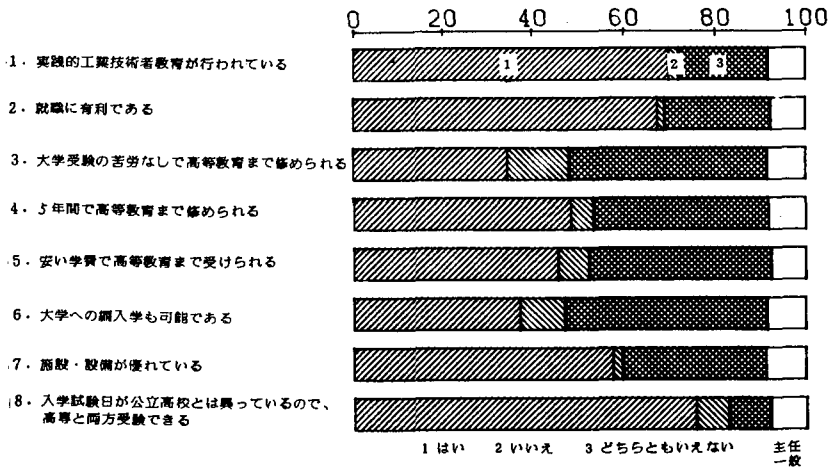


図6 高専の魅力

(設問 高専を受験しようとする生徒は高専のどのような点に魅力を感じていると思われますか。)

中学校卒業時点で将来の進路を決定するためには、生徒本人の適性を充分に見極めなければならないだろうと予想して、進路指導のための適性テストについて問うてみた。しかし、「適性テストを実施していない」という回答が47.2%あり、また「実施しているがあまり参考にしない」が21.5%あった。逆に「大いに参考にしている」はわずか3.4%しかなかった。適性テストの有効利用は進路指導上一考すべき問題ではないだろうか。

3. 中学校への広報活動

高専の広報活動は、中学校および中学生に高専についての知識を広める意味で重要であり、このことにより中学校教師による適切な進路指導ならびに生徒の進学意識を明確にするという効果があると思われる。そこで、高専の広報活動のあり方を尋ねた結果を報告する。図7は、高専について一般的な知識が中学生にあるかを問うた結果である。これは、高専受験生が「あり」の場合と「なし」の場合と別々に集計した結果である。主任では、受験生の有無にかかわらず、「ある程度知っていると思う」が過半数を占めている。これに対して、一般では、受験生の有無によって結果が異なった。すなわち、「受験生あり」の方では、「ある程度知っていると思う」が最も多く、次が「ほとんど知らないと思う」となっている。「受験生なし」の方では、この順位が逆転している。このことは、3年担任時に、受験生が無く、予想で判断したためと思われる。しかし、全体で「ほとんど知らないと思う」が約30%あり、さらに適切な広報活動の実施が望まれる。次に、高専を知った情報源を問うた結果を図8に示す。これによると、

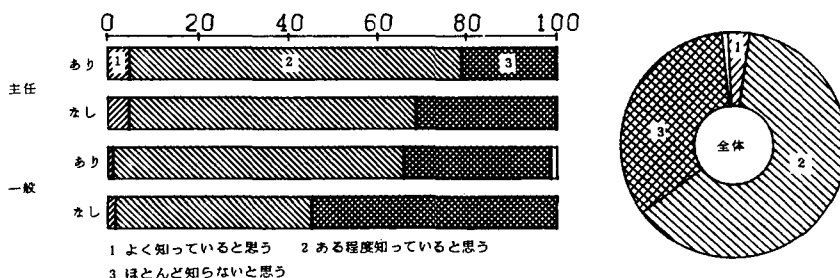


図7 高専の認識の程度

(設問 生徒は高専のことをどの程度知っていると思われますか。)

「中学校の先生からの説明によって」が最も多く、次に「父兄や友人の話を聞いて」が続いており、「文化祭等の機会に高専を見てきたから」という項目は、ごく少数の回答があったにすぎない。

広報活動の適当な方法を問うた結果を図9に示す。

「学校案内、入学案内等の資料を中学校に送付する」および「高専の施設や授業等の見学会を行う」が47%と同数であり、「高専についての説明会を行う」(36%)がこれに次いでいる。ところで、図9の項目2と4について、高専受験生がある場合とない場合で回答状況に差はないかどうかを知るために、主任と一般とを別々に集計した結果が図10である。項目2の「学校案内」、「入学案内」の方は、主任については受験生の有無にかかわらず同数であったが、一般についても、その差はわずかであった。しかし、項目4の「高専の施設や授

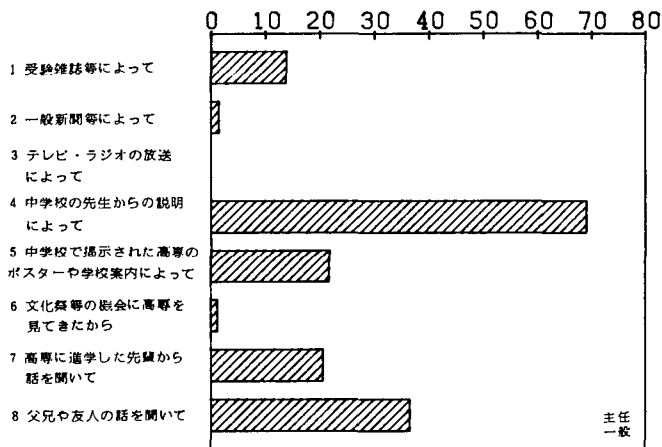


図8 高専について知った情報媒体

(設問 生徒が高専のことを知っているとする、それはどれによるとと思われますか。)

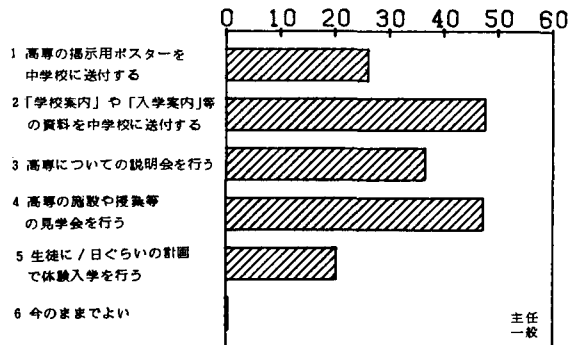


図9 広報活動の方法

(設問 高専をよく理解してもらうための方法はどれですか。)

業等の見学会を行う」については、主任の場合同じ割合であったが、一般の場合、受験生ありの方が多かった。受験生がある場合とない場合で広報活動の内容を区別して行うことが必要と思われる。

「学校案内」および「入学案内」がどのように利用されているかを問うた結果を図11に示す。「掲示して全生徒が見られるようにしている」、「高専を希望する生徒に見せる」がほぼ同じ割合で多かった(約35%)。図9で「高専について説明会を行う」が36%を占めていたが、その規模ならびに対象について問うたところ、図12のような結果となった。規模では、「学区ごと」に行くが67%で圧倒的に多い。対象については、「先生に行く」が最も多かった(50%)が、「生徒」「父兄」についてもそれぞれ30%を超えているので、これら三者に対して説明会を行うことが望ましいと思われる。

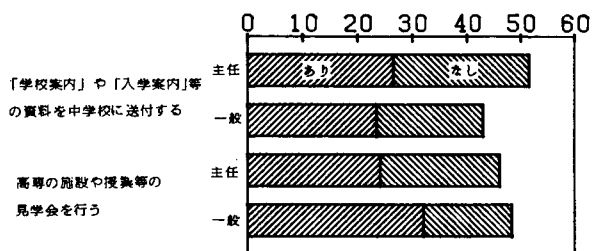


図10 項目2および4について、高専受験生の有無による集計結果

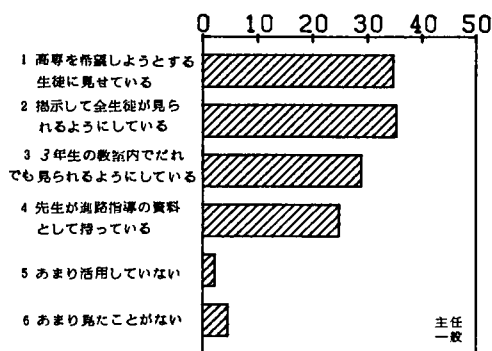


図11 「学校案内」、「入学案内」の利用状況
 (設問 高専の「学校案内」や「入学案内」を貴校ではどのように活用しておられますか。)

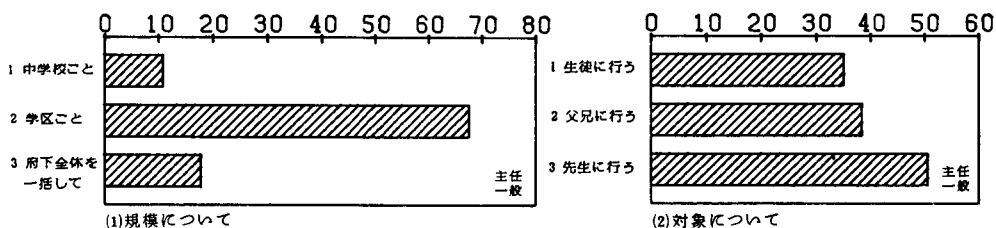


図12 説明会の規模と対象

(設問 高専の説明会を行うとしたらどの方法が適当だと思われますか。)

4. 高専制度についての評価

中学校教師が高専制度に対して下す評価は、中学生の進路指導、とりわけ高専への進路指導に少からず影響を及ぼすであろうと考えられるので、アンケートではその点も問うてみた。その結果、総合的評価としては校長、主任、一般とも60%以上の回答者が「よいと思う」と答えており、はっきりと否定的評価を下した者はごく少数であった(図13)。この結果を見る限り、

高専制度を頭から否定してかかる人はほとんどいないということになるが、本アンケートの回収率が低いため、この結果を直ちに一般化することには慎重でなければならない。

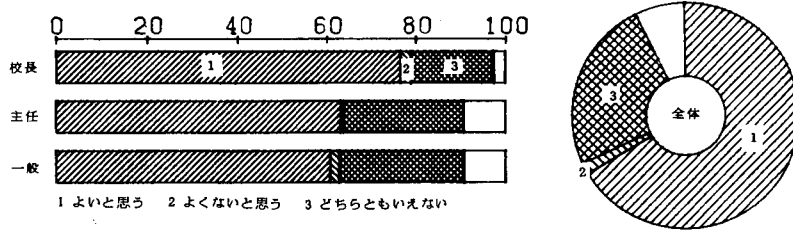


図13 高専制度についての総合評価

(設問 高専制度について、総合的にみてどのように思われますか。)

総合的評価だけでは回答者が高専制度のどのような点に着目しているかがわからないので、もう少し分析的に、高専制度のよい点悪い点を判断してもらった。その結果が表3である。これによると、よい点として挙げた人の数が比較的多かった1位から5位までの項目は、校長、主任、一般とも（順位は若干異なるが）共通である。すなわち、1位は三者とも一致して、「4. 一貫教育ができる」で、率も60%前後と非常に高い。2位以下には、「2. 教育の多様化に対応した制度である」、「11. 高度の専門知識が身につく」、「17. 実践教育に重点が置かれている」、「5. 大学に編入学ができる」といった項目が挙げられている。これらはおおむね30%前後の率であるが、ただ、「教育の多様化云々」の項目に校長だけは56.1%もが着目している。他方、よくない点として挙げられた項目は少かった。しかしその中で、「7. 中学校卒業時点で一生の進路を決定するのは早過ぎる」だけが30%を越えている点には注目したい。³⁾

表3 高専制度のよい点悪い点 (設問 高専制度を評価するにあたって、よい点・よくない点を挙げて下さい)

よい点				項 目	よくない点			
校長	主任	一般	合計		校長	主任	一般	合計
2.5	5.2	7.8	5.2	1. 6・3・3制から逸脱した教育制度である	7.6	4.0	7.2	6.2
56.1	36.4	34.0	42.0	2. 教育の多様化に対応した制度である	0.6	1.7	1.3	1.2
5.1	5.2	7.2	5.8	3. 在学期間(5年間)が長い	5.1	3.5	9.2	5.8
62.4	53.2	60.8	58.6	4. 一貫教育ができる	0.0	0.6	0.0	0.2
28.7	24.3	28.1	26.9	5. 大学に編入学ができる	0.0	1.2	0.0	0.4
19.7	7.5	11.8	12.8	6. 工業高校から編入学ができる	0.6	1.2	0.0	0.6
0.6	1.7	2.6	1.7	7. 中学校卒業時点で一生の進路を決定するのは早過ぎる	33.8	38.7	37.3	36.6
12.7	5.8	8.5	8.9	8. 早期教育ができる	1.3	0.6	1.3	1.0
17.8	17.3	18.3	17.8	9. 高等教育機関としての教育レベルを保持できる制度である	0.0	0.6	0.0	0.2
0.6	1.2	0.0	0.6	10. 高等教育機関としての教育レベルを保持できる制度ではない	1.3	5.2	4.6	3.7
33.8	36.4	36.6	35.6	11. 高度の専門知識が身につく	0.0	0.0	0.7	0.2
0.6	0.0	1.3	0.6	12. 高度の専門知識は得られない	7.0	8.1	11.1	8.7
15.9	13.3	11.1	13.5	13. 教育内容が充実している	0.0	0.0	0.7	0.2
0.0	0.6	0.0	0.2	14. 語込教育の傾向が強い	4.5	5.8	7.8	6.0
17.8	13.3	11.8	14.3	15. ゆとりある教育ができる	0.0	0.6	0.7	0.4
0.0	0.0	0.0	0.0	16. ゆとりある教育ができない	1.9	4.6	3.9	3.5
32.5	35.8	34.6	34.4	17. 実践教育に重点が置かれている	0.0	1.2	2.0	1.0
15.9	21.4	21.6	19.7	18. 受験勉強を強いられることがない	0.0	1.7	0.7	0.8
20.4	17.3	25.5	20.9	19. 少人数教育ができる	0.0	0.0	0.7	0.2
0.6	0.0	0.7	0.4	20. その他	2.5	1.2	8.5	3.9

以上の直接的な評価と別に、評価の対象を「高専卒業者」に変えた上で、間接的に、社会の評価を問うてみた。中学生の将来の進路についての社会的評価も当然進路指導に際して顧慮さ

れると思われたからである。その結果、総合的評価では「よいと思う」が各回答者層とも1位であったが、前述の直接的評価に比べると率が若干は低下しており、その分「どちらともいえない」「わからない」が増えている(図14)。これは間接的な判断である以上当然のことかもしれない。

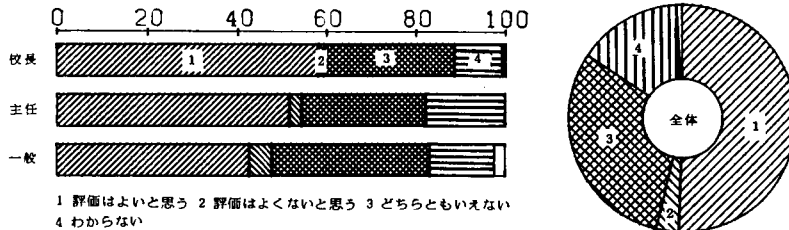


図14 高専卒業者についての社会的評価(総合)

(設問 高専卒業者に対する社会的評価について総合的にみてどのように思われますか。)

この評価を分析的に問うた結果が図15である。中学校教師自身の評価と同様、率の高い(25%以上)上位4項目をひろってみると、順位に相違はあるものの、各回答者層に共通である。この結果によると、社会は高専卒業者について、実践的能力、技術者としての高度な知識・能力、企業における即戦力を身につけているが、卒業者の絶対数が少ないため社会的に認識されにくいというイメージでとらえていると回答者たちは判断しているのである。なお、この設問の場合にもマイナス面に属すると思われる項目を挙げる者は少かった。このように直接的評価の場合も間接的評価の場合もマイナス・イメージがこれほど少いとはわれわれも予想していなかった。あるいはわれわれのアンケートの技法に難点があったのかもしれない。しかし「評価」というものは対象をよく知ってこそ有効になされるのであるから、中学校教師が高専についてもっとよく認識するなら今回とはまたちがった結果がでることも予想される。したがってこの点は機会が許せば再度調査を試みたいところである。

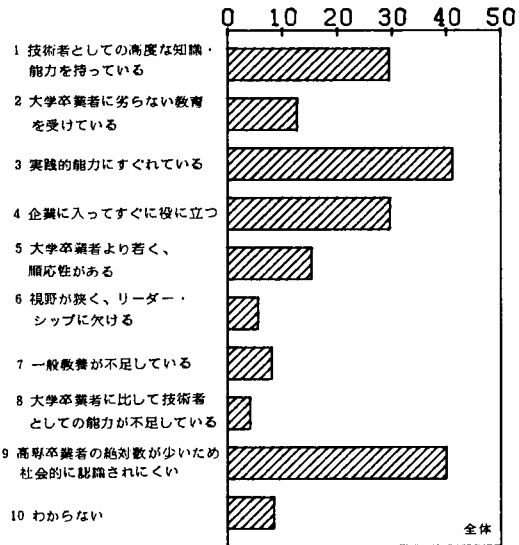


図15 高専卒業者についての社会的評価(分析)

(設問 高専卒業者に対して社会はどのように評価していると思われますか。)

5. 府立高専の選抜方法

5.1 現行の選抜方法について

本校で現在行われている学力検査は、公立高校よりも早く国立高専と同じ日となっているが、

それについてどう思うかを問うた結果が図16である。「今のままでよい」が全体で72.9%と圧倒的に多く、つづいて「公立高校と同じ日に行うべきである」が12%となっている。なお、回答者層による違いはほとんどない。「今のままでよい」とする回答理由は、その93%が今のままであれば不合格になった生徒が再度公立高校を受験できることをあげているが、これは前述の高専に対する魅力の1位(図6)と一致している。公立高校受験の腕だめしができるとする回答も若干(5%)ある。

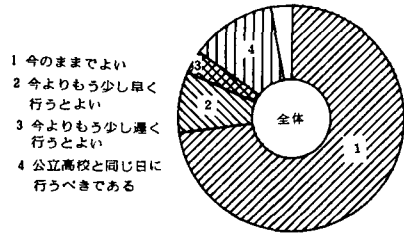


図16 本校の学力検査日
 (設問 本校の学力検査日についてどのように思われますか。)

次に学力検査の教科数(5教科)とその配点(国語, 数学各75点, 英語, 社会, 理科各70点)は公立高校と同じであるが, それについて問うた結果が図17と図18である。全国の高専では5教科が主流をなしている(60%以上)¹⁾が, 本アンケートでも「今のままでよい」が全体で86.7%と圧倒的に多い。配点についても「今のままでよい」が全体で71.4%とかなり多いが, 「高専独自の配点にしてよい」も21.1%ある。これらを回答者層別にみた場合, 教科数については層別による違いはほとんど見られなかったが, 配点については図18のごとく一般で他と若干の違いがみられ, 「今のままでよい」は59.2%となり, 「高専独自の配点にしてよい」は28.8%になっている。

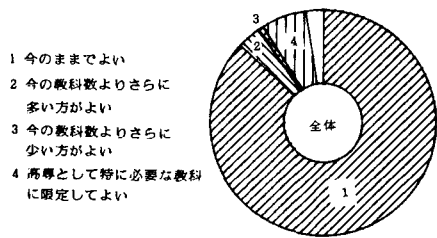


図17 本校の学力検査の教科数
 (設問 学力検査の教科数についてどのように思われますか。)

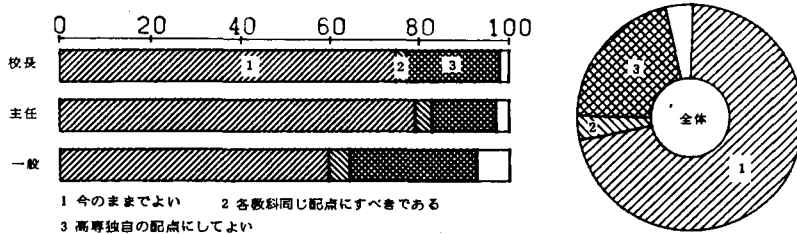


図18 高専の学力検査の配点

(設問 学力検査の教科の配点は, 公立高校と同じですが, それについてどのように思われますか。)

入学者選抜に際して, 公立高校の場合と同じような取り扱い(学力検査と内申とがほぼ同等)をすることについて問うた結果が図19である。「今のままでよい」は全体で68.7%とここでも現状肯定が多いが, 「高専独自の方法で行なってよい」が21.1%で, 以下「学力検査にもっと比重を置くべきである」(4.3%), 「内申にもっと比重を置くべきである」(2.9%)とつづく。これを回答者層別にみると学力検査の配点の場合と同様に, 一般層で「今のままでよい」が他より少く(55.9%), 「高専独自の方法で行なってよい」が増えている(32%)。

現行の判定方法でよいとする理由としては, 公立高校と違った方法では「進路指導が困難になる」という意見が圧倒的に多く, また「受験当日不調な生徒でも平常の実力を内申の形で考

慮してもらえ、**「5教科偏重になるのを避けられる」という意見もあった。**一方、内申重視に賛成の理由としては、**「受験のための勉強を避けたい」「日頃の積み重ねを大切にしたい」**等をあげている。また、学力重視に賛成の理由としては、**「内申そのものに学校差がある」、「高専に送っている内申は2学期のもので3学期のものとは異なり、本人の総合的なものとは言い難い」**等をあげているが、これは積極的に学力重視に賛成しているというより現状の内申そのものに問題があることの指摘と考えられる。

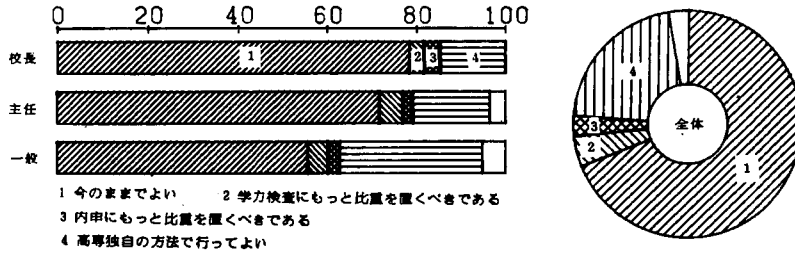


図19 本校の選抜時の学力、内申の取り扱い

(設問 入学者の選抜に際しては、公立高校の場合と同じような取り扱いが行われていますが、その点についてどのように思われますか。)

検査教科数、配点、判定方法ともに「今のままでよい」が全体でかなり高いことがわかったが、その割合はそれぞれ、86.7%、71.4%、68.7%と少しずつ低下している。これはその内容からみて、比較的小さい改革には抵抗は少いが、教科数変更のような大きい改革にはかなりの抵抗があることの現れであろう。

5. 2 志望学科決定の要因

第1志望学科および第2志望学科を決定する時、受験生はどんなことがらを考慮しているかということについて問うた結果を図20に示す。まず、第1志望学科を決定する場合(1)図)「自己の興味、適性を考慮する」が70%も占めており、2位の「高専卒業後の将来進路」(35%)に比し圧倒的に多い。次に第2志望学科の場合(2)図)、「自己の興味・適性」ならびに「自己の成績」が共に約40%であった。このことは、第2志望の段階になると、受験生として合格圏に入りやすい学科を選ぼうとする傾向が強まることを示している。

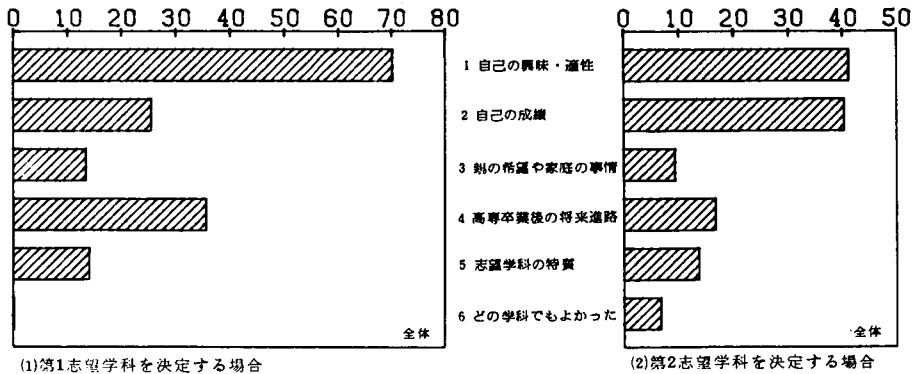


図20 志望学科決定の要因

(設問 今までに高専を受験した生徒が志望学科を決定する際に考慮した点はどれですか。)

5.3 学科別募集のあり方について

第2志望入学者選抜の方法について問うた結果を図21に示す。図よりいずれの回答者についても、第1志望学科受験者の定員不足の場合に限り第2志望者から選抜することに賛成するものが一番多かった(58%)。

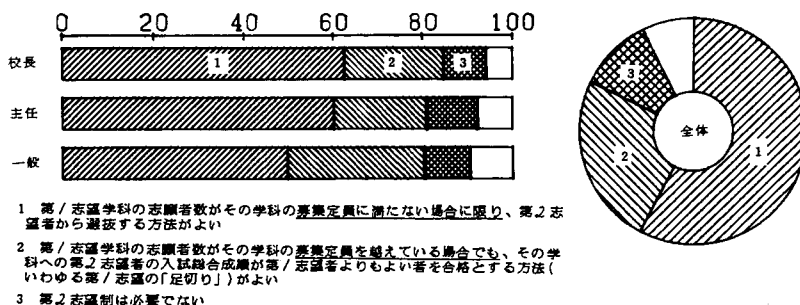


図21 学科別募集のあり方

(設問 第2志望入学者選抜の方法について、どう思われますか。)

そこで、各項目の回答理由を自由記述式により問うた結果をまとめると次のようになる。項目(1)については、「生徒の興味と適性の尊重、点数制による『たらい廻し』は入学後の定着性にかかわる。『やりたい』という第1志望を重視すべきで成績だけの振り分けは危険」、項目(2)については、「高専の学力水準を高く維持するためにはやむを得ない。専攻学科といえども中学生でその内容はほとんど理解できないから成績順の考えにもとづいて決定することが望ましい。」、項目(3)については、「第1志望に進めない場合、本人の希望にあわない。学科によって内容が大きく違う」等が挙げられた。上記の回答の根底には、入試成績を重視するか、受験者の志望を重視するかという問題が横たわっている。前者の立場では、第2志望者の中より選んでも問題ではないということになり、後者の立場では、受験生の興味と適性を重視し第1志望学科受験生より合格者を選ぶべきだということになる。

高専や職業高校における入学者選抜の方法として、志望学科の枠をはずして、学校全体としての定員を入試総合成績順に入学させる方法(一括募集)の是非について図22の結果を得た。「一括募集賛成」が25.3%、「反対」が39.5%、「どちらともいえない」が26.3%であった。

一括募集に賛成した教師に学科への振分け時期を問うたところ、「合格後すぐに振分けの方がよい」が8%にすぎず、残りの92%が「入学後の適当な時期に学科に振分けの方がよい」と答えた。一括募集に反対の理由を図23に示す。「志願時の第1志望をあくまでも優先させるべきである」という意見が多く、入学後の学科への振分けの際、志望学科に進めなくなる場合の生じることも指摘されている。一方、一括募集に賛成の理由を図24に示す。「入学後に高等専門学校の学科の特色をよく理解した上で専攻学科を決める方がよい」が多く、次に「中学校卒業時点で志望学科ま

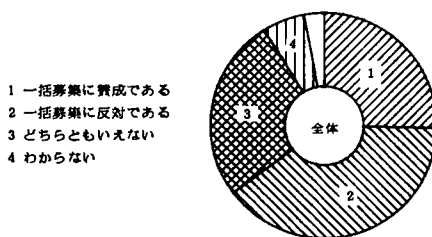


図22 一括募集の是非

(設問 入学者選抜方法として学科の枠をはずして、学校全体としての定員を入試総合成績順に埋めていく方法「一括募集」の是非についてどのように思われますか。)

で決めることに無理がある」が続く。

5. 4 その他

技術者教育を目的としているので、筆記テストでは判断しがたい要素、たとえば、受験生が将来工業社会で働きたい意志をどの程度持っているか、また、受験生がどの程度適性を持っているかを評価するため、面接や実技テストを実施することについての回答結果を図25に示す。この結果より面接について「あった方がより」という回答が68%もあることは注目に値する。実技テストについては、「あった方がよい」が43%、「わからない」が24%あった。これは、面接とちがって具体的なイメージがわからないからであると思われる。

国立高専の一部ですでに実施されている推薦入学制度について問うた結果、「あった方がよい」は42.2%、「必要ない」が30.2%、「わからない」が25.9%であった。推薦入学制度については、具体例を明かにした上で、その賛否を問う必要があると思われる。

6. あとがき

本調査は、本校での入試を前提とし、大阪府下の公立中学校教師を対象として行ったものであるが、全国の他高専に共通した項目も多い。したがって、本報告が高専全般における入学者選抜に関して、多少とも資するところがあれば幸いである。最後に、本調査実施に際して、ご協力いただいた中学校教師、適切なる助言をいただいた本校の元家範文助教授ならびにアンケート統計処理・図作成に協力いただいた情報処理センターの関係各位に深甚の謝意を表す。

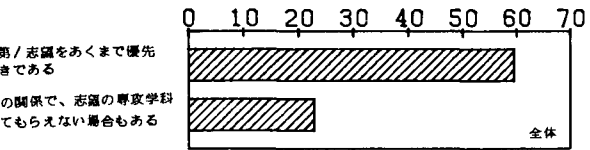


図23 一括募集の反対理由

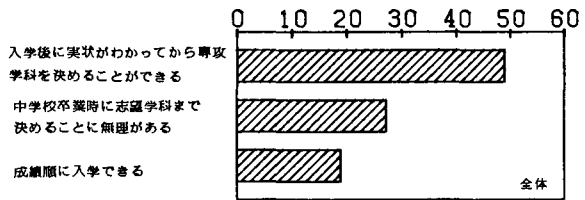


図24 一括募集の賛成理由

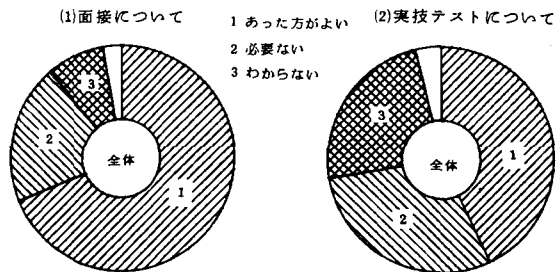


図25 面接、実技テストを実施することについて
 (設問 高専入学者の選抜に面接や実技テスト「特に技術関係」を行うことについて、どのように思われますか。)

参 考 文 献

1) 杉野他「高専入学者の選抜に関する研究(その1)」府立高専紀要第13巻 1979年
 2) 天野・小森「高専学生の意識調査結果の考察」高専教育第5号 1982年
 3) 葉柳「高等専門学校現状と課題」広島大学教育研究センター「大学研究ノート」第38号 1979年